

「邑知瀨」高圧送電線落鳥事故の経緯

沢田 隆

925-0047 石川県羽咋市御坊山町13-5

VYU04102@nifty.ne.jp

石川県邑知瀨では、古くからハクチョウやガン類の飛来記録や地名も残り、昨シーズンは1,000羽を越えるコハクチョウとマガン750羽が越冬しました。地理的にも東北～島根の日本海沿い越冬地ベルト帯の重要な中継地的要素も見られ、北陸地方有数のコハクチョウ越冬地となっています。

1987年、飛来数の増加に伴い農業被害が浮上、地元野鳥保護団体では対策を進める中で高圧送電線への衝突落鳥被害も認識しました。

1989年、地元野鳥保護3団体が衝突防止対策を北陸電力へ要望、翌年にはカラーリングで対策しましたが事故は続き、多い年では1993年に17羽のコハクチョウとオオヒシクイが犠牲となっています。これは確認できた数であり、水中やヨシ辺、雑草地内は発見も困難であり、実数はこれをかなり上回ると見られます。また、カモ類にいたっては年間50羽を越えるものと見られ、早朝、落鳥のカモ拾いが見られる始末です。

国内越冬各地の事例を見ても、この地域における事故率、事故数とも極めて異例であり、更なる対策を要望後、8年を経た1999年にカラスパイラルロードを導入しましたが事故は減少しません。

これまでの対策は送電線保全部品を着色し装着しただけであり、



図1. 送電線下の落鳥個体。

結果からも野鳥衝突防止対策とは言い難い物です。他電力会社の対策例から見ても申し訳程度のお粗末な物と言わざるを得ません。

すでに落鳥問題から15年を経ますが、本格的な防止策が取られず対策も長期化、企業の保護認識は極めて低い物と見られます。

このような状況下、さらに平行する高圧送電線の建設が進んでおり、これについても保護策を求めています。効果的な対策は聞かれませんが、

地元保護団体では各地の事例をふまえて、野鳥対策用のフラップ方式、バードレス球、光などの対応策を求め続けていますが、企業の壁は厚く遅々として対策は進みません。

地元では対応の限界と見られ、当会員として事の重要性を鑑み、国内を移動する渡り性野鳥の全国保護組織に御援助をお願いするものでございます。

本号巻末に、日本白鳥の会がこの件につき北陸電力へ提出した要望書とそれに対する回答が掲載されています。